
仮面ライダーディケイドAnother ~ World The Savior ~

激突皇

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

仮面ライダーディケイドAnother World The
Savior

【Nコード】

N8720Z

【作者名】

激突皇

【あらすじ】

無限に存在するいくつもの世界。そのいくつもの世界に崩壊の危機が訪れる。世界の崩壊を企む巨大な陰謀。それに対抗するため世界はある一人の少年を世界の救世主である「仮面ライダーディケイド」に選んだ。彼は世界の崩壊を阻止するため、世界を救うへ旅に出る。果たして、世界の崩壊を企む巨大な陰謀を阻止し、彼らは自分達の未来を守ることができるのか。全てを紡ぎ、未来へ導け！

プロローグ（前書き）

自分の初投稿小説です

暖かい目で見えていただければありがたいです
では、どうぞ

プロローグ

「ここは・・・」

無限に広がる闇

その中に少年は一人ポツンと立っていた

「なんで俺、こんなとこにいんだ・・・？」

わけもわからず混乱する彼に何かが話しかけてきた

「・・・れし・・・ね・・・」

「！？ 誰だ！」

「・・・え・・・れし・・・うねんよ・・・」

「誰かいるのか！？」

「・・・選ばれし少年よ・・・」

「選ばれし少年・・・それはオレのことか！？」

その質問に答えるように声は言葉を変えた

「・・・世界に崩壊の危機が訪れている・・・」

「世界に崩壊に危機？どういうことだ！？」

・・・君に救世主に力を与える・・・
・・・その力で・・・
・・・せ・・・をす・・・て・れ・・・

「ちよっ、オイ！どういうことだ！救世主の力ってなんだよ！？」

声が遠ざかっていく

「俺の質問に答えろ！オイ！！」

・・・たの・だぞ・・・大和・・・

その言葉を最後に彼の意識は遠のっていった

エピソードゼロ 前編 少年と救世主（前書き）

大和「zzzzzz」

美咲「大和くん、起きて〜！」

エピソードゼロ 前編 少年と救世主

「・・・とん・・・、や・とくん・・・」

また声が聞こえる

でもこの声は先ほどの声とは違い彼にとって聞きなれた声だった

「やまとくん・・・、大和くん・・・!」

声の主を思い浮かべようと頭を回転させようとする

(この声はみさ・・・)

「よしの芳野 やまの大和お!」

「はい!」

少女の声が突然中年の野太い声になり、しかも音量も急に跳ね上がったので少年、大和は勢い良く立ち上がった

「「「「「・・・」」」」」

周囲の視線が彼に集まる、大和は頭をフル回転させ状況を思い返す
ここは教室、現在は五時限目の日本史の授業、そして目の前には立腹の日本史の教師

「よお芳野、俺の授業はそんなに退屈だったか?」

教師のセリフで大和は自分が置かれた状況を理解した

「あー・・・その、先生の授業がつまらないわけではなくてですね、飯食った後で眠くなっちゃって・・・それで気がついたら・・・」

「寝てたというわけか・・・」

「はい・・・すみません・・・」

そう言い終えた直後クラスの生徒達がドツと笑い出す

「はあ、つたく罰として教科書32ページ読め」

「はい・・・」

普段ある程度まじめにしていたのであまり怒られずに済んだようだった

そして教科書を読み終えた後、彼は先ほどの夢について考えていた

「もう、大和くん授業中に寝ちゃだめだよ」

授業が終わり大和が次の授業の準備をしていると隣の席から彼がお世話になっている家の孫娘「望月^{もちつき} 美咲^{みさき}」が話しかけてきた

「しゃあねえだろ、気がついたら寝てたんだから。てか起こしてくれよ気づいてたんなら」

「起こしたよ、でも全然起きないんだもん」

「うつ・・・ま、まあいいじゃねえか、あんま怒られなかったんだし」

「そういう問題じゃないでしょ、もう・・・」

彼らは幼い頃から兄弟当然に育てられてきたのでこのような会話もよく見る光景だった
そして二人がそんなやり取りをしていると

「あいかわらず仲がよろしいですなあお二人さん」

彼らの二人の友人の一人、「坂本^{さかもと} 幸助^{こうすけ}」が声をかけてきた

「そうか？ふつうだろ」

「いやいや、お前らふたりは普通の男女の友達関係とは違う仲の良さだよ、うん」

「そりゃそうだろ、兄弟みてえなもんなんだから」

「いやまあそうなんだけどよ、なんつーかよ、うーん・・・」

幸助が考えているともう一人の友人、「立花^{たちばな}茜^{あかね}」が後ろから会話に加わってきた

「例えるなら、長年寄り添って生きてきた夫婦のような関係。じゃないかな？」

「ふうええ！！ふふふ夫婦！？」

ニヤニヤしながら言った茜の言葉に美咲が顔を真っ赤にして驚く

「おお！そくだよそれぞれ、俺が言いたかったのはそういうことなんだよ」

幸助が茜の例えにピンときたようであれ、二人はハイタッチをしていた

「夫婦って、お前らなあ・・・」

そんな二人を大和は呆れながら見ていた

「にやはは、まあ冗談はこの辺にして二人とも今日放課後暇？」

「まあとくに用事はねえけど、美咲はどうだ」

「ふ、夫婦・・・大和ちゃんと夫婦・・・」

美咲は大和の声にも気づかず俯きながらブツブツ呟いていた

「おーい、美咲」

「ふえ！？な、なに！？」

大和が顔を覗きながら声をかけたので再び美咲は顔を赤くして驚く

「だからあ、美咲ちゃんは今日放課後暇かってこと」

「あ、う、うん暇だよん」

「ならば、今日みんなでどっか遊び行かない？」

「ああ、いいぜ」

「うん、私もいいよ」

「よっし決まりな、んじゃ・・・」

幸助が言いかけたところでチャイムが鳴った

「おっと、時間切れか。じゃっまた後でな」

「約束だよー」

二人は各自の席へ戻って行き大和と美咲も自分の席についた

「じゃあなー」

「美咲ちゃん、大和くん、バイバイ」

「おう」

「また来週、幸助くん、茜ちゃん」

放課後四人でゲームセンター等で遊んだ後、時間も頃合となったので解散し、大和と美咲は自分達の家に向かった

「・・・・・・・・」

二人の間に会話は無い、家も一緒、クラスも一緒ともなれば二人きりで話すことなんてほとんどない
しかしそんなことは昔から同じなので彼らの間に気まずさはなかった
むしろこうやって無言で帰ることは彼らにとって落ち着くことだった

しばらく歩くと彼らの家である《望月写真館》に到着した

とはいえ今は写真館というより喫茶店に近い店になっておりそっちを目的に来る客の方が多かった

「「ただいまー」」

「おお、二人ともおかえり」

カウンターから話しかけてきた優しそうな雰囲気きふきの老人は大和と美咲を育てている「望月 宗太郎そうたろう」である
彼はこの近くでは有名な人で彼の淹れたコーヒー目当てに遠くから来る人も少なくなかった

「おかえりー、大和君、美咲ちゃん」
「おかえり」

「ただいまです」
「どうも」

常連の客に挨拶され軽く会釈をしてから二人は茶の間に上がり、仏壇に線香を焚き手を合わせる

「・・・・・・・・」

仏壇には三つの写真と年季の入ったカメラ

一つは優しそうな顔のおばあさん、名は「望月 日和ひより」

彼女は大和を拾い育てようと言った人で大和を自分の孫息子のように大切に育てていたが三年前にこの世を去った

残りの二つも前者の日和に負けないほど優しそうな顔をしていた
この二人の違いを挙げるとするとそれらに移っているのは二十代後半の若い男女であることだ

彼らは美咲の母親、「望月 美雪みゆき」と父親、「望月 真まこと」である
十年ほど前、親子三人で歩いているところにトラックが突っ込み、二人は美咲をかばってトラックに轢かれこの世を去った

両親を失った美咲は宗太郎と日和が引き取り大和といっしょに育てた

真の写真の隣に置いてあるカメラは写真家だった真の形見のカメラ

である

そして現在は大和、美咲、宗太郎の三人でこの家に暮らしていた

彼らにとつての日課が終わり、宗太郎の手伝いの為店に顔を出すと

「そうだ美咲、頼んどいたものは？」

「え？・・・あっ！」

そう言われた美咲は朝、宗太郎お使いを頼まれたのをに思い出した
ようだった

「ごめんおじいちゃん、今すぐ行ってくる！」

そして自分の鞆から財布だけを取り出し脱兎のごとく飛び出してい
った

それを見ていた大和もため息を一度ついてから

「美咲、オレも行く！じいちゃん、鞆よろしく！」

そう言つて大和は宗太郎に鞆を投げ美咲の後を追う

「おっと、二人とも気をつけるんだよ」

鞆を受け取りそう告げた宗太郎は二つの鞆を茶の間に置いた

「美咲ー！待てよー！」

少し走ったところで大和は美咲に追いついた

「え、大和くん？」

美咲は足を止め大和に振り向く

「俺も手伝う、荷物ぐらいもってやるよ」

「大和くん・・・ありがとう」

美咲は頬を赤く染めて笑顔で返した

「んじゃ行くか」

そして二人並んで商店街に向かおうとすると

ドゴオオオオオオン！！

「「！？」」

突然爆発のような音がして二人はその方向へ振り返る

「な、なんだ!？」

「爆発？」

その先には煙がいくつも立っていた
突然の出来事に混乱しているとその二人の間にオーロラのようなものが出現していた

「な、なんだよこれ!？」

そしてオーロラが大和を包み込んだ

「大和くん!!」

「美咲!!」

お互い手を伸ばすもその手は届かなかった

「……」

オーロラに包まれた大和は昼間見た夢のような場所にいた
しかしそこは無限の闇が続いていたあの世界ではなく宇宙のような
場所に無限といえる程の地球に似た丸い物体が漂っていた

「・・・選ばれし少年よ」

「この声は・・・」

声に振り返るとそこには黒いコートに白いマフラーを巻いた青年が
立っていた

「やっと会えたな、選ばれし少年 いや、芳野 大和」

「あんたは・・・あの時の声の主ってわけか？」

そう聞くと青年はオレに近づいてきた

「ああ、そうだな・・・ツカサ、とでも読んでくれ」

「なんだよそれ、コードネームみたいなもんか？」

「いずれ話してやる、だが今は時間がない」

そういうとツカサと名乗った青年は丸い物体の一つに近づいていった

「今この無限に存在する世界に崩壊の危機が訪れている」

「世界の崩壊・・・あの時も確かそう言ってたがどういことなんだ？」

「さつき、君のいた世界でなにか起こらなかったか」

その言葉に大和はハツとする

「そうだ、美咲と歩いてたらいきなり後ろから爆発が起こったんだ」

「その爆発の原因こそ世界を崩壊させようとしている連中だ」

「なんなんだ？その連中ってのは」

「まだ判らない、だが君の世界で行われていることこそ、世界の崩壊につながるものなんだ」

「どういうことだ？」

その質問にツカサは丸い物体に手をかざしながら答える

「それぞれの世界にはそれぞれの物語がある。だがそれが崩されることにより世界は簡単に壊れてしまう。それを知った連中は次々と世界を破壊していった。奴らの目的がただの破壊活動なのか、それともなんらかの目的があるのかはわからないが……」

「野放しにはできねえってことか」

ツカサは黙って頷き言葉を続ける

「そこで俺は君に白刃の矢を立てた」

「オレに……？」

「ああ、理由は判らないが君の身体にこの力が適合したんだ」

「これは・・・」

ツカサの手には九つの不思議なシンボル刻まれた箱のようなものとファイルのようなものがあつた

「《ディケイドライダー》と《ライドブッカー》、救世主の力の象徴だ」

「救世主の力・・・」

ツカサに手渡され大和はディケイドライダーとライドブッカーを受け取った

「使い方等は頭の中に入っているはずだ」

「へ？」

すると大和は頭の中に何かが流れ込むような感覚になる

「・・・ホントだ、使い方が判る」

どうやら今ので使い方が頭の中に入ったようだ
それを不思議に思っていると突然世界が歪む

「なんだ！？」

「くっ、時間切れか。 大和！」

ツカサは手から先ほどのオーロラを発生させる

「このオーロラに入れば君は元の世界へ戻ることができる、大和、その力で奴らの野望を阻止し、世界を救ってくれ！」

「・・・」

大和は目を閉じ、しばらく黙ると静かにこう言った

「この力があれば、この世界が・・・大切なモノが守れんだな」

この言葉にツカサは少し驚くとフツと笑い

「ああ、そうだ」

それを聞いた大和は目を開き力強い目で

「ならやってやる！ この力でこの世界を、俺の大切なモノを守ってやる！！」

そう言つてオーロラに飛び込んだ

「たのんだぞ、芳野 大和！」

その言葉を最後に大和は元の世界に戻っていた

大和が着いた場所は美咲と別れた場所ではなく

「なんだよ・・・これ・・・」

ボロボロになっていた商店街だった

「いやあああ！」

そこに聞き覚えのある叫び声が聞こえる

「・・・美咲!!」

大和はその方向へ駆け出した

「そんな・・・」

目の前から大和がいなくなりその場に立ち尽くす美咲

「大和くん・・・」

ふと美咲の頭の中に目の前で倒れている両親の姿が浮かび上がる

「あ・・・ああ・・・」

美咲の目から涙が次々と零れる、だがそこにまた爆発が起こる

ドゴオオオオオン！

「っ!?!」

ここにいたら巻き込まれるかもしれないと考えた美咲は動く気にはなれなかったが涙をぬぐい商店街へ向かった

「大和くん・・・」

自分の大切な人の無事を祈りつつ、美咲は走り出した

「なに・・・これ・・・」

商店街に着いた美咲は目の前で起きている光景に驚愕した

「助けてくれー！ー！」

「いやああああ！」

「がはあっ！」

昨日までの賑わいはそこにはなく、灰色の鎧をまとったような怪物やカマキリのような怪物が人々を襲っていた

「そんな・・・これって・・・」

目の前の出来事に混乱し美咲は後ずさる、その際小枝を踏んでしまい怪物のいくつかに気づかれる

「！」

「ひっ！」

気づいた怪物が美咲に近づいていく

「い、いや・・・」

美咲は拒むように首を振り後ずさるも怪物たちは歩みを止めないで、美咲に向かってくる

「いやあああ！」

叫びながら美咲は思いっきり駆け出した、それを追うように怪物たちも走り出す

（怖い、助けて・・・）

そう願う美咲は無我夢中で走る、しかしここまで走ってきて体力もほとんどなくなっていた為足がもつれてしまい倒れてしまう

「きゃっ！」

立ち上がろうとするが恐怖と疲れで足に力が入らない、そして振り返るとそこには怪物が立っていた

「ひっ！」

灰色の怪物が私に爪を向け、それを振りかぶる

（私・・・死んじゃうのかな・・・）

そう思った美咲の頭の中に走馬灯のように彼女のこれまでの出来事が流れる

友達と一緒に遊んだこと・・・

学校でおしゃべりしたり勉強したこと・・・

家族でいろんなところへ行って写真を撮ったこと・・・

そして最後に彼女の両親の葬式のときのことを思い出した

『ぐすつ・・・おとうさぁん・・・おかあさぁん・・・』

私はただただ泣いていた

私を庇ってお父さんとお母さんは死んでしまった

二人にもう二度と会えない、その事実にはただ泣き続けるしかなかった

『うつ・・・うううう・・・』

そんなとき、泣いている私の手を誰かが握ってくれた

『うつ・・・やまとくん・・・？』

大和くんだった

おばあちゃんが拾って育てていた男の子

そのときにはもう何度か会っていたから認識もあったし一緒に遊ん

だりもしていた

そんな大和くんが涙を流しながら私の手を握っていた

『おれが・・・まもってやる』

『え？』

『おれが・・・おじさんとおばさんのかわりに・・・おまえをまもってやる！』

「大和くん・・・」

怪物が振り上げていた爪を美咲に振り下ろそうとした

「・・・大和くん!!」

目をつぶり、今一番会いたい人の名前を叫んだ

「美咲に・・・手え出すんじゃないやねええええええええ!!」

ドカア!

「!?!」

その声に美咲は目を開け前を見た、すると今まで目の前にいた怪物は奥で倒れており、代わりに一人の少年が立っていた

そこには彼女が今一番聞きたかった声が

「ふう・・・」

今一番見たかった姿が

「大丈夫だったか」

今一番会いたかった人が

「美咲」

芳野大和が立っていた

エピソードゼロ 前編 少年と救世主（後書き）

というわけで始めましての方は始めまして

そして以前から読んでくれている方、自分の別の小説読んでいただ
いてくれた方も今作を読んでいただいてありがとうございます

大和「つっても前のやつを読んでたのがどんだけいるのか自体、微
妙なんだがな」

くっ・・・痛いところを・・・

エピソードゼロ 後編 く始まる物語く（前書き）

大和「颯爽登場！」

一同（どこの銀河美少年！？）

エピソードゼロ 後編 く始まる物語く

「ふう・・・」

全速力で走り、その勢いで灰色の怪物にとび蹴りをした大和は拳を握りしめ他の怪物の前に立つ

「大丈夫だったか」

そして助けた少女の方へ振り返りその名を呼んだ

「美咲」

「大和・・・くん・・・？」

美咲はその存在を確認するように名前を呼んだ

「ああ、他の誰に見えるんだ？」

大和がそう冗談交じりに言うと美咲の目から涙が流れ出した

「なっ！？ど、どうした！？ どっかやられたのか！？」

突然美咲が泣き出したので大和は慌てながら右往左往し始めた

「うつん、違うの」

その言葉に大和の動きはピタッと止まる

「突然目の前から大和くんがいなくなつて、もう会えなくなつちやうんじゃないかつて思つて。でも来てくれた、また私を助けてくれた。また・・・会うことができた」

「美咲・・・」

「それがうれしくて・・・」

そう言いながら美咲は涙をぬぐう、大和は微笑みながらその頭をなでる

「あつ・・・」

「俺はお前をおいていなくなつたりなんかしねえよ」

大和はなでていた手を放し、美咲が顔を上げ大和の顔を見上げる

「あの時約束したろ、俺が、おじさんとおばさんの代わりにお前を守つてやるつて」

「・・・うん」

大和がそう笑顔で言つと美咲は顔を赤く染める

（覚えててくれたんだ・・・）

あの時自分を救つてくれた言葉を覚えていたことに美咲は喜びを覚えていた

「さあて、待たせたな」

言いながら大和は振り返り怪物を睨みつける
彼が殴り飛ばした怪物もすでに立ち上がり大和を睨みつけている様
に見えた

「こいつを襲ったんだ・・・命の保障はしねえぞ」

そう言った大和はポケットにしまっていたディケイドライバー腰に
かざす

するとドライバーからベルトが出てきて大和の腰に巻きつく
それを確認してからバックルを開きベルトの左側にライドブッカー
を取り付けその中からカードを一枚抜き取った

そのカードには顔に七本の縦線が入っており緑の目にマゼンダ色の
ボディーをした戦士が描かれていた
それを目の前に突きつけ

「いくぜ、変身！」

その掛け声と共にカードを裏返し、開いたバックルに差し込み、バ
ックルを閉じた

『K A M E N R I D E D E C A D E !』

電子音のような声が響き、大和の周りに九つの人型の影が出現しバ
ックルから七枚の赤いプレートが飛び出る

そして人型の影が大和に集まりその体を包み込む

そして赤いプレートが仮面に突き刺さり体の透明な部分をマゼンダ
色に染める

最後に目が緑色に光り、大和はカードに描かれていた戦士、「仮面
ライダーディケイド」に姿を変えた

「大和・・・くん・・・？」

「美咲、危ないから少し下がってな」

「う、うん・・・」

美咲は戸惑いながらも頷き、後ろの物陰へ駆け出す

「さあ・・・いくぜ！」

拳を握り、大和・・・いや、ディケイドは怪物に向かって走り出す
そしてさっきの灰色の怪物にまたパンチを叩き込む

後ろから虫のような怪物が攻撃を仕掛けるもそれをかわし逆に蹴り
を入れる

だがもう一体の灰色の怪物に攻撃を食らってしまう

「ぐっ・・・」

よろめくも体制を立て直し相手を見直す、すると頭の中に情報が流れ込んでくる

「灰色のがオルフェノクで虫みたいなのがワーム・・・か」

怪物の正体が判り、ディケイドはカードを抜き取る

「先にオルフェノクからやるか」

バックルを開き抜き取ったカードを差し込みバックルを閉じる

『KAMEN RIDE FAIZ!』

するとバックルにギリシャ文字の に似たマークが浮かび上がり
デイクイドを別の姿、体中に赤いラインの入った「仮面ライダーフ
アイズ」に変えた

「また姿が変わった・・・?」

遠くで美咲が驚く

そして二体のオルフェノクに攻撃を当てひるませてからまたカード
を抜き取りバックルに差し込む

『FORM RIDE FAIZ! ACCEL!』

デイクイドファイズ（以下Dファイズ）の胸の部分が開きファイズ
アクセルフォームへ変わる
そして腕のスイッチ押す

『Start Up』

その電子音が合図にDファイズが超高速で動き出し二体のオルフェ
ノクとワームに攻撃を当てていく

「こいつでとどめだ!」

再びカードを抜き取りバックルに差し込む

『FINAL ATTACK RIDE FA / FA / FA / FA
IZ!』

刹那、二体のオルフェノクとワームの周りに赤い三角錐のフォトンブラッドが現れ目にも止まらぬ速さで突き刺さる

「ぜやああ!!」

『3 / 2 / 1 . . . 』

『Time Out』

電子音が鳴り終わると共にDファイズが現れ、開いていた胸の部分が閉じ元のファイズへ戻る
それと同時に二体のオルフェノクはファイズの紋章が浮かび上がり灰となった

するとバツクルが勝手に開き中からファイズのカードが飛び出しデイクイドの姿に戻ってしまう

「なんだ？」

飛び出したカードを見るとさっきまで描かれていたファイズの絵が消えていた

「大和くん！危ない！」

後ろからの美咲の声に振り返ると目の前にワームがいてデイクイドに腕の鎌を振り下ろした

「ぐおっ！」

避けきれず攻撃を喰らうもまた体制を立て直しワームに殴りかかる

「くっ・・・この！」

だがその直後さっきのDファイズアクセルフォームのようにワームが超高速移動する

「なに！？」

そしてまた攻撃を喰らってしまう

「がはっ！」

そして思い出す、さっき見たワームの特徴を

「クロックアップか・・・それなら！」

また新しいカードを取り出し、差し込む

『K A M E N R I D E K A B U T O !』

するとバックルにカブト虫のような紋章が浮かび上がり
デイクイドをカブト虫に似た戦士、「仮面ライダーカブト」へ変える
そしてすぐさま別のカードを差し込む

『A T T A C K R I D E C L O C K U P !』

再び超高速移動をするデイクイドカブト（以下Dカブト）
そしてクロックアップしていたワームと鉢合わせる

「！？」

「悪いが虫は好きじゃないんでな、そろそろ決めさせてもらっぜ・
・この虫野郎！」

そう言い、新たにカードを差し込む

そしてワームがDカブトに向かって飛び掛ってくる

『FINAL ATTACK RIDE K A / K A / K A / K A
BUTTO!』

バックルから頭の角へ、角からDカブトの右足へエネルギーが流れ
飛び込んできたワームにDカブトは回し蹴りを叩き込む

「ぜやああ!!」

回し蹴りを喰らったワームはその場で爆発し、そして

『CLOCK OVER』

クロックアップの効果が切れ、またバックルが開きカードが飛び出
てきて

ディケイドの姿に戻った

「またか・・・」

そしてカブトのカードもまたなにも描かれていなかった

もう回りに敵がないことを確認すると

再び閉じていたバックルを開き変身を解除した

「大和くん!」

後ろで避難していた美咲が大和が変身を解除したのを確認してから
駆け寄ってくる

「これでひとまず大丈夫なはずだ」

ドライバーをポケットにしまいながら美咲の方へ振り向く

「うん・・・でも今のつて・・・」

「ああ・・・ちょっと複雑だから後で話す。それよりじいちゃん
が心配だ、家に戻ろう」

「う、うん」

二人は望月写真館に向けて走り出した

途中怪物に出くわしたが別のカードを駆使し倒した

だがやはりディケイド以外のカードは使った後何も描かれてなかった

『FINAL ATTACK RIDE A / A / A / AGITO』

「ぜやああ！」

ディケイドアギト（以下Dアギト）の跳び蹴りが炸裂し怪物、アン
ノウンが頭の上に天使の輪のようなものを浮かべた後爆発した
そしてDアギトの腰のバツクルが開きディケイドを除くカメンライ
ドカードの最後の一枚、アギトのカードがバツクルから飛び出し、
描かれていた戦士の絵が消える

「これで最後・・・結局こいつ以外全部使った後絵が消えちゃった
な」

ディケイドのカードを見つめながらアギトのカードをライドブッカ
ーにしまいそう言う

「美咲、もう大丈夫だぜ」

「うん・・・」

大和にそう言われ物陰に隠れていた美咲が駆け寄る
ここまで来るのに幾度も怪物達に襲われその度大和が倒していた
美咲が大和の隣に並んだのを確認すると大和は歩を進めた

少し歩くと自分達の目的地、望月写真館に着いた

「さて、やっと着いたな」

そう言いながら自分達の住む家を見上げる
すると隣にいた美咲が大和に寄りかかる

「美咲？」

「ごめん・・・少し疲れちゃった・・・」

無理もない、突然目の前にいくつもの怪物が出現し、それを家族同然に育った大和が倒すという非日常に遭遇したのだから
元々体力の多くない美咲にはかなりきついものだった

「無理すんな、もう家なんだからとっと入って休もうぜ」

「うん、ありがとう・・・」

寄りかかった美咲に肩を貸して大和は自分達の家に入る

「ただいま、じいちゃん」

「ただいま、おじいちゃん・・・」

「おお大和くん、外が騒がしかったけど何かあったのかい・・・って美咲、どうしたんだい？」

奇跡的に宗太郎は写真館から一步も出ておらず、店の中にも怪物は入ってきていなかった

「ちといろいろあつて疲れたんだ、部屋で休ませてくる」

「そうかい、何があつたかは後で教えてくれればいいからそうして

やっしてくれ」

宗太郎の言葉に頷き大和は美咲を部屋につれていった

美咲を部屋のベツトに寝かせると大和はその辺にあったクッションに腰掛ける

「ありがとう、大和くん」

「気にすんな、何か欲しいものとかあるか？」

「ううん、大丈夫・・・」

「そっか・・・」

「・・・・・・」

二人も間に沈黙が流れる、大和はどのタイミングでディケイドのことを言うか、美咲はどうやってさっきの出来事を聞くか・・・この二人には珍しい気まずさが漂っていた

「ええっと、とりあえずなんか飲み物持ってきて来るな」

沈黙に耐えられなくなったのか大和がそう言い立ち上がろうとすると

「あつ、待って！」

美咲が手を掴みそれを制する

「な、なんだ？」

「あつ、えつと・・・その・・・」

理由もなしに引き止めた美咲は戸惑い、少し考えそして

「り、りんごジュースが欲しい・・・な」

「・・・・・・・・」

思いがけない言葉に大和は固まる、数秒間再び沈黙が流れた後

「プツ」

「え？」

「あつははははは！」

壮大に大笑いした

「ふえ！？」

大和の笑い声に今自分が何を言ったのかを思い出し美咲は顔を真っ赤にした

「ちょ、ちょっと！そんなに笑わないで！」

「ははは、悪い悪い。なんつーかさ、気が抜けちまって」

「む、どういうこと？」

美咲をなだめ、大和は腰を再び下ろす

「いや、いきなり世界を救えとか言われたりあんな化けモンと戦ったりしてさ、正直気が重かったんだ。でも今ので気が楽になった」

「世界を救う・・・？」

「ああ、これから話す。でもその前に」

「？」

ワンテンポ置いてニヤツと笑いながら大和はこう言った

「りんごジュース持ってきてやる」

その言葉に美咲は再び顔を赤くし

「もう！大和くん！」

怒る美咲に笑いながら大和はジュースを取りに行った

戻ってきた大和は美咲にジューズを渡し、自分も飲みながらあの場所でのことを美咲に説明した

「・・・で、俺にそのディケイドの力が適合したってわけだ」

「救世主の力、ディケイド・・・」

「ああ、んでその力があれば世界の崩壊を阻止できるってわけだ」

一通り話し終わると手に取っていたジューズを一気に飲み干した

「へえ・・・なんか、大変なことになってたんだね」

「でも俺にしかできないことなんだ、やってやるさ」

そう言つて意気込みながら拳を握り締めた

・・・そのとおりだ・・・

「「!?!」」

突然部屋に声が響くと二人をあのオーロラが包んだ

「えっ！」「っ、どっ！？」

「ここは・・・さっき言った場所だ。　んで、今の声は・・・」

声の主を探し、大和はキョロキョロと見回す

「こっちだ、大和」

その声に二人は振り返る。するとそこには

「思ったより早い再会だったな、ツカサ」

大和にディケイドの力を託したツカサがいた

「え？この人が？」

「ほう、この子が・・・。　聞いてのとおり、俺がツカサだ」

ツカサは美咲の方を向き自己紹介をした

「あ、は、はじめまして！望月　美咲です」

美咲も自己紹介をし頭を下げた

「んで？今度はどうした？」

「ああ、それは君達に伝えておくことがあつてな」

その言葉に二人は耳を傾ける

「まず一つ、大和、君の活躍で君達の世界は崩壊の危機から救われた」

「なに？ ホントか？」

「ああ、君があゝの怪人たちを倒していなければそのままあゝの世界は崩壊していた」

その事実にも美咲が質問する

「で、でも大和くんが倒した怪物以外にもたくさんいましたよ。それでも救われたんですか？」

「そこで二つ目だ、世界の救世主とされるディケイドが現れたことで奴らがそれを脅威と感じ始めた」

「ん？それとオレ達の世界が救われたのと同じ関係があるんだ？」

「つまりディケイドという奴らにとってこれまでにない脅威に奴らも分が悪いと判断したのだろう、それであゝの世界の破壊を捨て退散したというわけだ」

「なるほどな」

大和は納得し、ふとあることを思い出す

「そついやディケイド以外のカードが使った後得が消えたんだがあれってどういうことだ？」

「それが三つ目だ」

ツカサはそう言うと二人に背を向け地球のようなものに歩み寄る

「この無限に存在する世界、その全てが君達の世界のような平凡な世界とは限らない。科学がとてつもない進歩を遂げた世界、科学ではなく魔法が栄えた世界、また、その二つが両方ある世界と様々だ。」

そんな世界があることに二人は少なからず驚いていた
その二人を差し置いてツカサは話を続ける

「だがその全てが平和であるとは限らない、一つの大きな力をめぐり戦争する世界、奴らのような連中に支配された世界、人類とモンスターが争いを続ける世界だってある」

そんな事実二人はまた驚き大和は眉を潜め美咲は顔を顰めた

「そんな様々な世界に存在する人のために戦う戦士、『仮面ライダー』。その中の九人の力を使い、戦うライダー、それが・・・」

「『仮面ライダーディケイド』、世界の救世主ってわけか」

「ああ、そのとおりだ」

「んで、その九人の力って奴は無くなっちゃったみたいだが？」

「それは、その九人のライダーは今はいないからだ」

「なにい!？」

大和だけでなく黙って話を聞いていた美咲も驚愕する

「んじゃあオレはディケイドの力だけで戦わなくちゃなんねえってことか？」

「いや、そうじゃない。 たしかにそのライダーはもういない、だがその力は様々な世界の人間に受け継がれている」

「どういうことだ？」

「つまり」

ツカサは二人に向かって振り返りこう言った

「その世界のライダーと力を合わせ、その世界を救え。 そうすればその世界のライダーの力がカードに宿る、というわけだ」

そのスケールのでかい目的に大和は少し驚くが元の表情に戻り

「なるほど、 んでその世界とやらにはどうやって行くんだ？」

「それは君達の住む写真館を使うんだ」

「家を？」

「うむ、 かつてのディケイドも使用した方法だ」

「かつてのディケイド? そんなのいたのか」

「ああ、といっても昔の話だ。俺も存在したということぐらいしか知らない」

「あの、それでどう写真館をつかうんですか？」

「背景ロールを使うんだ」

「背景ロールってあの写真を撮るときに背景を変えるあのあれか」

「ああ、それを回すことで別の世界へ行くことができるようにしておいた」

「しておいたって、何かしたんですか」

「すこし君達の家の手を施した」

「あんた人に黙ってなにやってんだ・・・」

「いやすまない、緊急事態だったものでな」

謝りながら再び二人に近づく

「ひとまずこれで君達に伝えることは全て伝えた。最後に大和、君にもう一度聞いておく」

「なんだ？」

「奴らの野望を阻止し、世界の崩壊を防いでくれ」

その言葉に美咲は大和の方に顔を向ける

大和は口元を吊り上げ、真っ直ぐツカサを見つめこう言った

「俺は一度決めたことは貫き通す、世界だろうがなんだろうが救ってやるよ!」

ツカサはそのセリフにフツと笑いオーロラを二人の近くに発生させる

「そうか、なら頼んだぞ。 芳野 大和!」

そして目の前からオーロラが消えると二人は元の部屋に戻っていた

「戻った・・・か」

「・・・・・・・・」

美咲は少し暗い顔つきでベッドに腰掛ける

「ねえ、大和くん」

「ん?なんだ?」

「私に、できること・・・何かあるかな?」

「美咲にできること・・・？」

その言葉を聞くと大和は真剣な顔になった

「私はその・・・救世主の力とかそういうのは無いし、体力も無いから戦ったりはできないけど・・・」

「美咲・・・」

「それでも、私は大和くんの力になりたい！」

そう言う美咲の顔はとても真剣な顔だった

そして大和はその美咲の頭に手を置く

「だったら、一つだけ頼まれてくれねえか」

「？」

「オレが戦いに行ってる間、帰りを待っていてくれ」

「え・・・？」

その言葉がどういう意味なのか判らず声を上げる

大和は頬を掻きながら照れくさそうに

「いやさ、自分の帰りを待ってくれる人がいるとき、なんか落ち着くだろ。だからさ、本読みながらも飯作りながらもいいからさ、待っていてくれ」

「大和くん・・・うん、私待つよ！大和くんが帰ってくるの！」

「ああ、頼んだぜ、美咲」

「うん！」

二人は真剣な顔から笑顔に戻っていた

「おや、美咲、もう大丈夫なのかい？」

二人が下に降りると宗太郎は夕食を作っていた

「うん、それより材料足りた？」

「なあに、店の余り物を使えばなんとかなるさ」

「そっか」

「なあ、じいちゃん。あの背景ロールってやつ使えるか」

「ん？たしか使えるはずだよ。でもなんでまた？」

「いや、ちょっとな」

「そうかい、あれは自由に使ってかまわないよ」

「ありがとな、じいちゃん」

「それより二人とも、これを運んでくれ」

「あいよ」

「はい」

「さて、これが」

夕食を終え、大和と美咲は例の背景ロールの前にいた

「これを回すと別の世界に行けるんだね」

「あいつの言うことが正しけりゃな、んじゃ、いくぞ」

大和は背景ロールを回す鎖を握る

「あ、待って」

そう言い美咲も鎖を握る

「私も一緒にやりたい」

「ああ、んじゃいくぞ」

「「せーの！」」

二人で一緒に鎖を引く、すると背景ロールの絵が変わる

「これは・・・」

そこには古代遺跡のような場所に大きく描かれた古代文字があった
その絵を見た瞬間、大和の頭に情報が流れ込んでくる

「『クウガの世界』・・・か」

一人の少年と一人の少女の世界を救う旅が、今始まった

次回、仮面ライダーディケイド Another

「これがクウガの世界か」

「へえ、他の世界でも学校に通うんだ」

「俺は一之瀬 勇樹、よろしくな！」

「未確認生命体出現！」

「変身！」

「こいつがクウガ・・・」

全てを紡ぎ、未来へ導け！

エピソードゼロ 後編 〈始まる物語〉（後書き）

さて、序章ことエピソードゼロ、いかがでしたか？

大和「つか待て、前書きでなんてこと言わせてんだ」

いやあ、あの流れからしてあのセリフがいいかなと

美咲「そういえば前回はあんなことしてたけど、あれってなんなんですか？」

ああ、あれは前書きを単行本とかのカバー裏とかにある「コマ漫画風にしていこうと思ってね

今後もやっていく予定ですのでよろしくお願いします

大和「今後まあんなこと言われるのか・・・」

美咲「あはは・・・じ、今回は特別編、登場人物紹介編です」

特別編 〓キャラクター紹介その1〓（前書き）

大和「今回は特別編」

美咲「キャラクター紹介です」

特別編 くキャラクター紹介その1く

というわけで次のエピソードの前にキャラクター紹介をしたいと思います

ではまずメインキャラから

名前 / 芳野 大和 (よしの やまと)

性別 / 男

年齢 / 17歳

職業 / 高校二年生・仮面ライダーディケイド

身長 / 170cm

体重 / 58kg

容姿 / 髪は黒で所々はねている

っている
少し痩せ型の体系で本人はもう少し筋肉を付けたいと思

その他概要

正義感が強く困っている人はほっとけない性格
しゃべり方が少しがさつでなにかあるとすぐに首を突っ込むため

不良等と争うことが多かった。（故に多少ケンカ慣れしている）

基本的に怖いもの知らずだが犬とキノコと女の子（特に美咲）の涙は苦手。

思ったことをストレートに言うので普通は恥ずかしくて言えないようなことも平然と言ってしまうが逆にそこに惹かれて彼を慕う者も多い。

ずっと一緒に育ってきた美咲のことを意識しているが恋愛の類に疎い為本人は気づいてない。

名前 / 望月 美咲（もちづき みさき）

性別 / 女

年齢 / 17歳

職業 / 高校二年生

身長 / 158cm

体重 / 本人の強い希望のため省略

容姿 / 髪は茶色っぽい黒でストレート、長さは肩に掛かる程度
スタイルはそこそこよく、胸は「Dぐらいあるんじゃないの」とのこと（大和談）

その他概要

心優しく気弱そうに見えて意外と物事をはっきり言う性格。

幽霊の類と雷が苦手で遭遇するとすぐに涙目になる。

家事はたいてい得意で特に料理は絶品。

周辺の人（大和以外）に認知されるほど大和に好意を寄せている
がかなりの奥手でその思いは伝えられずにいる。

名前 / 望月 宗太郎 （もちづき そうたろう）

性別 / 男

年齢 / 63歳

職業 / 望月写真館オーナー

身長 / 165cm

体重 / 45kg

容姿 / 髪のがほとんどが白髪

眼鏡とセーターを常時着用している

その他概要

だれにでも優しく非常におおらかな性格をしている。

彼の淹れるコーヒーは非常に美味でファンも多い。

親のいない二人を自分の子供同然に育てなによりも大切にしてお
り、また二人からも強く信頼されている。

以上、メインキャラの望月家の紹介でした

お次にエピソードゼロで登場した主要キャラを紹介します

名前 / ツカサ

性別 / 男

年齢 / 不明

職業 / 不明

身長 / 約175cm

体重 / 不明

容姿 / 見た目は20代前半
髪は黒で整っている

その他概要

全てが謎に包まれた青年で大和に世界の崩壊の事実を伝えディケイドの力を託した張本人。

クールに見えるが意外と熱いところもある。
世界の崩壊を防ぐことが使命。

名前 / 坂本 幸助 (さかもと こうすけ)

性別 / 男

年齢 / 17歳

職業 / 高校二年生

身長 / 168cm

体重 / 55kg

容姿 / 茶色のツンツンヘア
一般的な男子高校生の体系

その他概要

大和と美咲の友人、茜を含めこの四人でいることが多い。

気さくでどこか憎めないようなタイプ。

名前 / 立花 茜（たちばな あかね）

性別 / 女

年齢 / 17歳

職業 / 高校二年生

身長 / 162cm

体重 / 46kg

容姿 / 金髪のロング

クラスの女子が羨むほどのモデル体系

その他概要

大和と美咲の友人で美咲を大和絡みでよくからかっている。
陽気な性格で誰とでも仲良くなる。

とまあ今回は以上です

主要キャラが増える度にこつこつした番外編をやっていると思います
では

エピソードクウガ 第一章 転校そして超変身（前書き）

大和「ここが、クウガの・・・」

「アータタタタタタ・・・フォワタア！」
「ヒデブ！」

大和・美咲「絶対違う!!」

エピソードクウガ 第一章 転校そして超変身

「『クウガの世界』か・・・」

頭の中に入ってきた情報をつぶやく大和
それが気になり美咲が大和に質問する

「クウガ・・・って？」

そう聞かれた大和は情報を読み取るのに集中するため、人差し指を
額に当て答えた

「クウガ、現代に蘇った古代の戦闘種族グロンギを倒すため超古代
民族リントが作り出したベルト、アークルにより変身し戦う戦士、
だそうだ」

額から指を離し、美咲に顔を向けながら言う

「へえ、ディケイドとはいろいろ違うんだ」

「ああ、たしかそれぞれの世界にはそれぞれの物語があるとか言っ
てたから仮面ライダーっつー概念もそれぞれ違うんだろっな」

そう言っていると大和は背景ロールから離れ近くの窓を開け、外の景色を
見る

「・・・っつか家ごと移動すんのかよ」

「え？」

美咲も窓から外を見る、するとそこには今まで見えていた景色は全く全く別の景色が広がっていた

「うわー、ホントだー」

美咲は窓から見たことのない景色を身を乗り出して見ていた

「まつ、こんな時間だし行動すんのは明日からになりそうだな」

大和は窓から離れ、側にあつた椅子に腰掛けた

「うん、そうだね。でもどうするつもりなの？」

美咲は窓の淵に腰掛け大和に聞く

「・・・考えてなかった」

「ええ・・・」

大和の気の抜けたセリフに美咲は思わず窓の淵から落ちそうになった

「まつ、明日朝飯食いながらも考えようぜ。ふわあああ、っとそろそろ風呂入って寝るとすつか」

時計を見ると九時を指しており、大和は欠伸をして眠そうに部屋から出ようとする

「もう・・・、でも私も眠くなっちゃった・・・あふう」

美咲も同意しかわいらしい欠伸をした

「ん？なら先に入るか？」

「うん、そうさせてもらいまーす」

美咲はそう言い眠そうに浴場へ向かった

「これがクウガの世界か」

部屋に残った大和は窓の外から違和感のようなものを感じつつ外を眺めていた

「ふう、そろそろ寝るか」

風呂から上がり部屋着に着替えた大和はしばらくいじっていた携帯を置き布団に向かう

（にしてもこっちでも携帯使えんのな）

そんなことに今更気が付きながら布団に入ろうとしていると

「大和く〜ん」

美咲の間の抜けた声に動きを止める

「なんだ？」

とりあえず呼んでいるので美咲の部屋に向かう

コンコン

「美咲、どうした？」

美咲の部屋のドアをノックして部屋の主を呼ぶ

「あつ、入って入って！」

なぜか急いでいた美咲にはなマークを浮かべつつ部屋に入る

「一体なんなんだ？」

「これ見て！これ！」

そう言い美咲は大和に服を突きつける

「なんだこれ？制服？」

パツと見、普通の制服だが大和や美咲の通っていた高校のものではない

「多分そうだと思うけど、今までの制服の隣に掛かってたの」

「ふむ・・・一応俺の部屋も見てみよう」

大和は美咲を連れ自分の部屋へと移動する

「・・・こっちにもあったな」

クローゼットを開くと今までの制服と別にもう一つの制服が掛かっていた

「ん？なんだこれ」

制服を手にとると一枚の紙切れが落ちたのでそれを拾う

「これは、ツカサから？」

そこにはこう書かれていた

『大和、美咲。君達にこれからの世界の巡り方を教えておく。』

「世界の巡り方？」

美咲がそう言い、大和は読み続けた

『君達の元にそれぞれの制服があるはずだ、その胸ポケットに生徒手帳と地図がある。』

そう読み上げた大和は掛けていた制服から生徒手帳と地図の紙を取り出す

『君達にはその場所に記された学校に通ってもらおう。』

「ってなんだと!？」

大和は驚きつつも読み続ける

『その学校にはその世界のライダーがいる、そのライダーと共に奴らによる世界の破壊を阻止するんだ。』

「この世界のライダーっていうのはさっき言ってたクウガっていう

のだよね」

「ああ、そのはずだが」

『転校の手続きはすでに済ませてある、その学校で自分のことを説明すれば問題ないはずだ。』

「ほんと何でもありだなオイ」

ツカサの手回しに突っ込みを入れつつ続きを読む

『最後に次からの世界でもその世界のライダーがいる場所に行けるよう手を回しておくということをここに記しておく。では、検討を祈る。 ツカサ』

「へえ、他の世界でも学校に通うんだ」

「まあ、この世界でやることは判ったってことだな」

大和は紙切れを丸めゴミ箱に投げ入れ制服をクローゼットに掛けた

「とりあえず明日転校ってことだし今日はいろいろあったんだ、明日に備えてもう寝ようぜ」

「うん、そうだね」

そう言い美咲は自分の部屋に戻っていく

「それじゃあ、おやすみ、大和くん」

「ああ、おやすみ」

大和はすでに布団に潜り込んでおり、美咲はそれを見て微笑みながら自分の部屋へ戻っていった

「これでよしと」

大和は部屋で新しい制服を着ていた
今日はこの世界での学校に転校する日なのだった

「んじゃ、朝飯食いに行っか」

朝食を摂るために部屋から出る

「あつ」

「ん？」

大和が部屋を出ると美咲も新しい制服に身を包み自分の部屋から出たところだった

「お、おはよう、大和くん」

「ああ、おはよう」

「えっと、ど、どうかな？」

美咲はもじもじとしながら大和に聞く

「え？・・・ああ、変なところはないと思うぞ。 似合ってる」

「ホント？よかった」

美咲はほっとしたように微笑む、それを無意識に大和は見つめていた
その視線に気づいた美咲は

「どうしたの？、やっぱり変なところある？」

そう言われると大和は視線を逸らし頬を掻きながら

「あ、いや、なんか新鮮だなと思ってな」

「ふーん？」

「そ、それよりとつとと飯食おうぜ」

「あ、うんそうだね」

二人は朝食を摂るため下の階へ降りた

「そう、あなたが今日転校するっていう芳野大和君と望月美咲さんね」

学校に着いた二人は転校の手続きの為職員室へ来ていた

「わかったわ、それじゃあ二人のクラスへ案内するわね」

「はい」

「よろしくお願いします」

教師に導かれこの学校での自分達のクラスへ向かう

「ここよ、ちょっと待っててね」

そう言い教師が教室へ入っていく

『はい、席に着きなさい！ホームルーム始めるわよ』

「うう、緊張するね・・・」

大和の隣で美咲が不安そうに言う

「まあ入学したときみたいにやれば大丈夫だろ、なんかあってもオレがなんとかしてやつから」

「う、うん・・・」

『えー、最後にこのクラスに転校生が来ることになりました』

その教師の言葉に教室はドツと騒ぎ出す

『はいはい静かに！それじゃあ二人とも、入ってきて』

「んじゃ、いくぜ」

「う、うん・・・」

二人は教室のドアを開け入っていく、すると教室がざわつきだす

「それじゃあ二人とも自己紹介をよろしく」

「はい」

先に大和が一步前に出て自己紹介する

「芳野大和だ、よろしく」

自己紹介が終わり大和は一步下がる

「ねえねえ、ちょっとかつこよくない？」

「うん、クールな感じで、しかも結構イケメン」

大和が下がると教室からそんな会話が聞こえる
そしてこんどは美咲が一步前へ出る

「え、えと、望月美咲です、よろしくお願いします」

そう言いペコリと頭を下げる

「ちょ、かわいくねあの娘」

「しかも胸結構でけえ」

教室からはまたそんな会話が聞こえた

「えー二人は家庭の事情で少しの間この学校に通うことになりました、皆仲良くしてあげてね」

教師の言葉に生徒ははいと答えた

「それじゃ、二人の席はあそこね。 芳野君が後ろで望月さんが前」

「はい」

先生に席を指示され二人は席に着く

「よっ」

大和が席に着くと隣から声を掛けられる

「ん？」

「俺は一之瀬いちのせ 勇樹ゆうき、よろしくな！」

そう名乗った少年は右手をサムズアップさせた

「ああ、こつちこそ、一之瀬」

「あー、そういう堅苦しいのはなしで勇樹って呼んでくれ」

「判った、じゃあ改めてよろしく、勇樹」

「おう、よろしく！」

「一之瀬君、HR中よ、静かにしなさい」

「あ、すいません」

勇樹が先生に注意され生徒達が笑い出す

（結構おもしろそうなクラス、だな）

そんな光景を見ながら大和はそう思っのだった

「はい！てなわけで転校生に質問のコーナー！」

一時限目の授業が終わると突然勇樹がそんなことを言い出し二人の周りにクラスのほとんどの生徒が集まった

「・・・・・・・・」

「ふえ、え？」

この状況に大和は啞然とし美咲はおろおろしていた

「みんな！この二人に質問はあるか？」

「どこから来たの？」

「趣味は？」

「どんな異性がタイプ？」

「二人ってどんな関係？」

「俺と付き合ってくれ！」

勇樹の一言で二人は質問攻めにあう

（てか一人おかしいのがいるぞ）

大和は心の中でツッコんだ

「ふええ！あの、えと、あの〜」

美咲はいくつもの質問にあたふたしていたのだった

「つたく、やっと開放されたか」

昼休み、その後も休み時間のたびに質問され、やっと質問攻めから開放された大和と美咲は勇樹に連れられ食堂へ向かっていた

「ははは、まああいつらを悪く思わないでくれ、よそから来たのがめずらしいだけだったんだ」

「てかお前が言い始めたんだだろうが」

「いや、俺がやらなくても誰かがやるぜ」

勇樹と大和はすでに意気投合したらしくそんな会話をしていた

「美咲、大丈夫か？ なんなら俺がなんか買いにいくぞ」

そんな二人の後ろには少し疲れ気味の美咲がふらふらと歩いていた

「大丈夫だよ、ちょっと疲れただけだから」

「あー、ごめんな、そこまで疲れるとは思ってなかったから」

「うん、本当にちょっと疲れただけだから。 気にしないで」

「あんま無理すんなよ」

「うん、ありがとう」

「お兄ちゃん！」

会話の途中で突然こちらに向かってポニーテールの少女が走ってきた

「ん？おう、綾香！」

「お兄ちゃんもこれからお昼？」

「ああ、お前もか？」

「うん！ あれ、その人たちは？」

少女が大和と美咲を覗き込む

「ああ、今日クラスに転校してきたんだ」

二人は一步前に出て少女の前に立つ

「芳野大和だ、よろしく」

「望月美咲です、よろしくね」

「はい！あたしは一之瀬 あやか 綾香です！こちらこそよろしくおねがい

します！」

三人の自己紹介が終わると勇樹が手を叩き注目させる

「はいはい、自己紹介が終わったところでそろそろ行こうぜ、座れなくなっちまう」

「おっと、そうだな」

こうして四人は食堂に入った

「へえ、お二人は一緒に住んでるんですか」

「つつてもオレは居候みたいなもんだがな」

席と昼食を確保できた大和たちは食べながら他愛もない話をしていた

「そういや二人って家庭の事情とかでこっちに來たんだよな、親はどんな仕事してんだ？」

会話の中で出てきたその質問に大和と美咲の箸が止まる

「親は・・・」

「・・・死んでる」

「・・・えっ？」

素っ気なく言った大和の言葉に二人の箸も止まる

「オレたちがまだ小さい頃に事故で死んだ」

「そ、そっか・・・なんかすまん」

ばつが悪そうに勇樹が言う

「気にすんな、初めてじゃねえんだ」

「本当にすまん」

「気にすんなっつーの、ほら、うどん伸びるぞ」

「あ、ああ」

しばらく気まずい空気が流れたがすぐにまた他愛のない話に戻った

「では、これでH Rを終わります」

「起立、礼」

『さようならー』

帰りのH Rが終わり生徒達は帰りの支度をしたり部活の準備をしたりしていた

「大和！」

大和も帰りの支度をしていると勇樹に声を掛けられた

「お前も帰るだろ、だったら一緒に帰ろうぜ」

「ああ、いいぜ、美咲も帰るだろ？」

「あ、私はお使い頼まれてるから先に帰ってて」

「んじゃ俺も付き合うぜ、大和もそうするだろ」

「ああ、でもいいのか？」

「いいさ別に、そうだ、確か綾香も買い物があるとか言ってたし、ついでに商店街も案内するぜ」

「本当？ありがとう」

「んじゃ、綾香に伝えてくるから校門で待っていてくれ」

「わかった」

そして勇樹は走って教室を出てった、大和と美咲も鞆を持って教室を出た

「ありがとう、勇樹くん、綾香ちゃん、おかげで頼まれてたものが買えたよ」

「いってことよ、俺たちはもう友達だろ」

「そうです、私達は同じ釜の飯を食べた友なのです」

「いや、学食と一緒に飯食っただけだろ」

商店街で買い物を終え四人は帰り道を歩いていた

「そつえばお二人のお家ってどの辺なんですか？」

「ええっと、方向からしてこの商店街のすぐ先かな」

「へえ、じゃあ案外近所かもしれませんね。あたし達の家もこの先なんです」

「そんなんだ、そうだったらいいね」

「はい！」

美咲と綾香もまた仲良くなっていた

「あ、そうだ、お前達に聞きたいことがあるんだが」

「ん？なんだ」

途中大和が一之瀬兄妹に聞き出した

「実は・・・」

言いかけたところで警報が鳴り出す

「なんだ！？」

『未確認生命体出現！今すぐに非難してください！繰り返します・・・』

・
」

「未確認生命体・・・ってことは」

「あいつらか！」

「あ、おい！勇樹！」

放送を聞いたとたん勇樹は走り出す、そしてそれを大和たちも追い掛けた

とある工場の前、グロンギは警察の発砲をものともせずに行った

「くっ、やはり効かないっ」

「ジャラゾグスバ」

謎の言葉を発し警官に襲い掛かる

「うわぁ！」

「「どりゃぁー!!」」

そこに大和と勇樹が跳び蹴りを入れグロンギを突き飛ばす

「って、なにやってんだ大和!? お前は下がってる！」

「そついうな、俺は結構場数踏んだ。問題ねえよ」

「そついう問題じゃねえ！」

そして言い合いを始めた

「とにかく下がってる! 俺がやる！」

「あ、おい！」

大和を後ろに下げ勇樹が前に出る、そこに美咲と綾香も到着する

「はぁはぁ、二人とも速いよ・・・」

「ふう、大和さん美咲さん、下がってた方がいいですよ!」

「ってお前もかよ、勇樹のやつ何する気だ？」

「まあ見ててください!」

「「？」」

そう言われ二人は勇樹に注目する

「さぁお前ら！俺が相手だ！」

グロンギに宣戦布告すると勇樹は腰に手をかざす、すると勇樹の腰にベルトが出現した

「あれは！？」

そして右手を左肩の前に突き出しそれを右にスライドさせていった

「変身！」

そして左腰のスイッチを右手で押した

すると勇樹の体が変わりこの世界の仮面ライダー、クウガに変身した

「うそ！？勇樹くんが！？」

「こいつがクウガ・・・」

「いつけえ！お兄ちゃん！」

大和と美咲は驚き綾香は変身した兄を応援していた

「いくぞ！」

そう叫び、クウガはグロンギに突っ込んでいった

「おりゃあ！」

変身した勇樹、クウガがグロンギに殴りかかり戦闘が始まった

「は！おりゃ！どおりゃあ！」

クウガはパンチやキックを次々とグロンギに叩き込む、だがグロンギもやられっぱなしではなかった

「ギギビジバスバ」

「うお！？」

グロンギはクウガを殴りそれを受けたクウガは一瞬ひるむ

「このやろー！」

体制を立て直すとクウガは落ちていたパイプを手取る

「超変身！」

再びベルトに手をかざすとクウガの体とベルトの赤い部分が青く変わり「ドラゴンフォーム」に姿を変えた

「色が変わった！？」

「あれがドラゴンフォームか」

その光景に離れて見ていた美咲と大和はそれぞれの反応を示していた

「ドラゴン・・・？何ですかそれ？」

そして隣で応援していた綾香は大和のセリフについて聞く

「クウガにはいくつかの姿がある、さっきまでの赤い姿は格闘戦に特化した「マイティフォーム」、今の青い姿は俊敏性が強化された「ドラゴンフォーム」、他には緑の姿の超人的な感覚神経を持つ「ペガサスフォーム」、紫の姿の攻撃力と防御力が高い「タイタンフォーム」、他にもあるらしいが基本的にはこの四つを使って戦うようだ」

大和は綾香の質問に頭の中の情報を読みながら答える

「へえ、詳しいんですね大和さん。警察や科学者でも知らないようなクウガのことたくさん知ってるなんて」

「まあ、ちよつといろいろあつてな」

その辺は知られるといろいろ面倒なので濁した
その間にクウガは持っていたパイプをドラゴンロッドへと変化させ
グロンギに突っ込んだ

「大和くん、勇樹くんが持ってたパイプが変わったよ！」

「あれはクウガの能力だ、マイティ以外の姿はその姿によって手に持った物を自分専用の武器にできるんだ。 つつてもその形に近いものしかできないけどな」

今度は美咲が聞いてきたので大和は答える

「あ！工場の中に入っていつちゃった」

クウガとグロンギは戦いながら工場の中に入っていた

「オレ達も行くぞ」

大和が工場に向かい美咲と綾香もそれに続いた

「はあああああ！はあ！」

ドラゴンロッドで次々と攻撃していくクウガにグロンギは押され気味だった

「ブ・・・ボボララゼザ！」

身の危険を感じグロンギは逃げようとするがクウガに回り込まれる

「これで終わりだ！必殺！スプラッシュドラゴン！」

グロンギはドラゴンフォームの必殺技を喰らいその体にクウガの紋章が浮かび上がる

「ズゴ・・・ブガガ！」

そして断末魔と共にグロンギは爆発した

「よっしゃ、いっちょ上がり・・・」

「後ろにまだいるわ!」

「え!？」

ドラゴンロッドを地面に突き勝利の余韻に浸っていると後ろから聞こえた女性の声に後ろを振り向く
そこには翼を広げクウガに突っ込む新たなグロンギがいた

「うお!」

なんとかそれを避けグロンギを見た

「今度は飛ぶのかよ!？」

「勇樹!これを使いなさい!」

警官服を着た女性は腰の銃をクウガに投げ渡す

「おっと、サンキュー。超変身!」

クウガは「ペガサスフォーム」へと姿を変え銃をペガサスボウガンに変えた

そして遅れて大和たちが工場の中に入る

「今度はペガサスカ」

「とうちゃーく!あ、お母さん!」

「え？」

大和達の声に振り向く女性

「綾香！？こんなところ来ちゃだめでしょ！ それにあなた達は？」

「あいつのダチです、あなたは二人の母親？」

「え、ええ、ってそうじゃなくて！危ないからここから離れなさい」

「あの、グロンギも勇樹くんも行っちゃいましたよ」

美咲がそう言うと同はさっきまで戦っていた場所を見る、だがそこには誰もおらず代わりに天井に穴が空いていた

「上か、行くぞ」

「ちょ、だから待ちなさい！」

勇樹達の母親の制止を無視し大和たちは階段を登っていった

「よつと、つてもう終わったか」

大和達が着いたときには既にグロンギはおらず変身を解いた勇樹がただけであつた

「ああ、逃げられちゃった」

そう言い勇樹はグロンギが飛んでいったであろう方向を見つめる

「ちよつとあなた達！」

勇樹達の母親は大和達に話しかけた

「なんですか？」

「あんなところに一般人が入り込んだら危ないでしょ！」

「いや大丈夫ですって、オレ戦えますし」

「そういう問題じゃない！たえそうだったとしてもあなた達はまだ子供なんだからこういうことは大人に任せていればいいの！」

「そういう割には勇樹を戦わせてたじゃないですか」

「それは・・・」

言われて勇樹達の母親は言いこもる

「クウガが唯一グロンギを倒せるからだよ」

代わりに勇樹が答えた

「それに俺は民間協力者として扱われてるからいいんだよ」

そう言いながら元に戻った拳銃を母親に手渡した

「ま、母さんもこの辺でいいだろ。それより帰ろうぜ、俺腹減っちゃったし」

「え、ええ・・・」

勇樹達の母親は複雑そうな顔をしながら銃を受け取り答える

「あ、遅れましたが俺は芳野大和です」

「私は望月美咲です」

「そう、私は一之瀬 かおる 薫よ。ちょっと失礼」

勇樹達の母親、薫は携帯を取り出し相手と会話する

「一之瀬です、はい、一体は倒しましたが一体は逃がしました、ええ、わかりました」

携帯を切り勇樹達の方を向く

「ごめん、これから署で会議が入って今日は遅くなるわ」

「ええー」

「まじかよー」

「ごめんね、晩御飯はお弁当とかで済ませて」

「「ぶーぶー」」

勇樹達是不満の抗議を挙げる

「あ、じゃあ二人とも家に来る？」

「「「え？」」」

美咲の提案に三人は同時に聞き返す

「だから二人とも家で晩御飯食べてたらどうかかって」

「ほんと！？いいの美咲さん？」

「うん、家は大丈夫だよ。 薫さんもそれでいいですか」

「ええ、でもいいの？家の人に迷惑じゃないかしら」

「多分大丈夫ですよ、じいちゃんそういうの気にしないっつーか客来るの好きですから」

「そう？それじゃあお言葉に甘えて、二人とも、あまり迷惑かけちゃだめよ」

「「はい」」

「それじゃあよろしくね」

そう言っただ薫は立ち去った

「んじゃ、帰るとするか」

「うん」

「「お世話になりまーす」」

そして四人は望月写真館へ向かった

次回、仮面ライダーディケイド Another

「私にクウガのこと教えてください!」

「あ、アニキ！」

「お前はもう戦わなくていい」

「やっとオレの出番か」

「未確認生命体・・・十号？」

「お母さん！！！」

全てを紡ぎ、未来へ導け！

エピソードクウガ 第一章 〱転校そして超変身〱（後書き）

どうも、エピソードクウガが始まりました

ということでこの二人を召喚

勇樹「始めまして、勇樹です」

綾香「綾香です、よろしくお願いします！」

今後この二人がどう動くのか、ご期待ください

・・・答えられるかどうかはわかりませんが（オイ

勇樹「・・・えっ俺等これだけ？」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8720z/>

仮面ライダーディケイドAnother ~ World The Savior ~

2012年1月14日15時46分発行